

東南アジア研究センター

1968年度第2・四半期報告

1968年7月から9月にいたる、1968年度第2・四半期の東南アジア研究センターの活動状況を要約報告する。

現地調査研究としては、前期にひきつづき福井捷朗助手（東南ア研）が、バンコク連絡事務所長代理として勤務するとともに、水稻の植物栄養学的研究をつづけている。3月以降、インドネシアの各地において、研究計画立案のための予察を行っていた本岡武教授（東南ア研）は、7月10日帰国した。石井米雄教授（東南ア研）は、8月17日より、タイ国のバンコクにある、チュラロンコン大学政治学部アジア研究所主催の「アジア研究シンポジウム」に代表として出席し、討論に参加した。口羽益生助教授（竜谷大・文）は、センターとマラヤ大学の共同研究計画の予備調査を実施するため、8月25日、マレーシアに赴いた。坪内良博助手（東南ア研）は、プリンストン大学において、開発途上国における人口問題の研究を行なうため、9月9日渡米した。

交換計画としては、sabbatical leave で来日した、ミシガン大学の John E. Bardach 教授をセンターに招聘した。Bardach 教授は、著名な魚類学者であるが、とくに東南アジアの魚類につき造詣が深く、またメコン河の開発にかんする専門家として知られている。

出版計画としては、「東南アジア研究双書」の第2冊目、矢野暢著『タイ・ビルマ現代政治史研究』および第3冊目の本岡武著『東南アジア農業開発論』があいついで刊行された。

図書整備計画は、これまでもっぱら、欧米語文による基本的文献の収集のみに力を注いできたが、これと平行して、ようやく現地語文献の入手にとりかかれる段階となったことを報告したい。タイ国クルサパー社発行の「タイ語文叢書」全327冊が最近到着し、目下整理中である。また、タイ国近代史研究に不可欠の、チュラロンコン王時代のシャム王国官報（1874～1908）のゼロックス化作業も、その約50%を完了した。

東南アジア研究センターの前途には幾多の困難が横たわっているが、われわれは全力をつくしてこれを克服し、真に学問的な成果をあげることによって、大方のご期待にお応えしなければならぬと自戒している。今後共ご援助、ご支援をお願いする次第である。

1968年9月

京都大学東南アジア研究センター所長

相 良 惟 一